

行田歴史系 390

資料がかたる行田の歴史

90

再び姿を現わした前方後円墳 若王子古墳

（若王子古墳群）

今回は、郷土博物館で収蔵する須恵器が出土した若王子古墳について紹介します。これらの須恵器は、明治39（1906）年に発掘した際に見つかった遺物で、埼玉村、さきたま考古館の所蔵を経て、現在、郷土博物館に移管されたものです。

若王子古墳は、埼玉古墳群・稲荷山古墳から東南東約800メートルに所在する前方後円墳で、江戸時代後期の記録にはその存在が記されていました。その古記録によると、すでに石室が開いていて、大刀などが発見されたそうです。その後同年に、古墳の上に建っていた若王子社の境内整備に伴う発掘が行われました。横穴式石室を発掘すると、甲冑、馬具、土器などが出土したとされています。また、石室の天井と奥壁に使われていた

部分の墳丘が崩れていた可能性が高いと考えられます。そして時は流れ、昭和9（1934）年、市報ぎょうだ令和8年5月号のこのコーナーで掲載した若小玉古墳群と同様に、小針沼埋め立て工事によって、若王子古墳も崩れて消滅してしまいました。

しかし、その後の調査・研究によって、若王子古墳の正確な位置と大きさなどが明らかになりました。まず、ある研究者が『埼玉村地図』と地籍図を調査し、若王子古墳を現在の地図上に表すことに成功しました。また、埼玉県立さきたま史跡の博物館が昭和23（1948）年の米軍が撮影した空中写真に、前方後円墳の形がうっすらと現われるソイルマーク（表層土層の変色範囲）が写っていることを発見しました。そのソイルマークを基に若王子古墳の遺存状況、墳丘の規模などを調べるため、平成23（2011）・24（2012）年にトレンチによる確認調査を行いました。その結果、ソイルマークのとおり周堀が確認されて、墳丘長推定92メートル、周堀は一重の方形であることが判明しました。

このように調査・研究を進めていった結果、完全な形ではありませんが、若王子古墳が消滅してから、およそ80年ぶりに再びその姿を現わしました。

（郷土博物館 篠田泰輔）



若王子古墳出土須恵器（郷土博物館蔵）

緑泥片岩は、前五神社に建立された忠魂之碑と日露戦役記念碑に転用されました。この発掘後には石室も解体されて大

まちに広がる至福の二杯の香り

薄島 春希さん（忍・24歳）



今月は、自転車でコーヒーの移動販売をする薄島春希さんを紹介します。

薄島さんは、高校生の時に焙煎されたコーヒー豆の香りに魅了され、コーヒーに興味を抱くようになりました。新型コロナ拡大による緊急事態宣言が発令された大学時代、「在学中に何か特別なことがしたい」と思い、興味を抱いていたコーヒーの販売を志すようになりました。

しかし、コーヒーに関する知識はほとんどなく、コーヒーを提供するために必要な知識を習得するためには専門店で働いた方が良く考えた薄島さんは、市内のコーヒー店でアルバイトを始めました。そこで、学業とアルバイトを両立しながら、コーヒーに関する知識やドリップの技術などを学びました。



コーヒー店開業の夢へと一歩を踏み出した薄島さんですが、もっとも大きな課題はコーヒーの販売方法。当初はオンラインでの販売も検討しましたが、来店した方と直接話をしながら販売したいと思い、店舗販売か移動販売かを迷っていました。店舗を持つとなると、

安定した営業環境が得られる一方、初期投資や固定費などの負担が大きくなります。逆に、移動販売では初期費用などを抑えられ、地域の需要に合わせた柔軟な営業展開ができる反面、天候の影響や移動の手間などが生じます。まだ学生であった薄島さんは、初期費用の負担も小さく、学業とも両立のしやすい自転車での移動販売が現実的で最適な選択であると思い、大学4年生の時に開業しました。

念願叶ってスタートした移動販売。市役所前での販売からスタートし、現在は市内で開催される各イベントに出店しています。そこでドリップされるコーヒーには一切の妥協を許さず、失敗したと感じたときは、もう一度作り直すこともありま

す。また、常連客の好みや季節に合わせて、豆の配分や挽き方、注ぎ方を変えるなどして、香りが立ち上る最高の一杯を提供しています。薄島さんは、今後も定期的に出店できる場所を増やしていきたいながら、行田に根付きながら「常連客から愛される店にしていきたい」と語りま

す。現在は焙煎されたコーヒー豆を仕入れていますが、焙煎からドリップまでの全てを提供できるよう自転車からキッチンカーへと移行していくことも考えているそうです。今や「コーヒーのない生活は考えられない」「コーヒーには何かしらの形で関わっていたい」と語る薄島さん。コーヒーへの情熱のこもった一杯は、これからも来店した人の喉と心を潤します。

俳句 行田

ぎょうだ はいだん

俳句応募方法

一人3句以内。住所・氏名ふりがな・電話番号を明記の上、はがきまたは封書で広報広聴課まで。
※毎月末日必着
なお一部添削して掲載する場合がありますが、不要であれば「添削不要」と記載してください。

尺蠖やぶつけて繋ぐ無蓋貨車

【句評】尺蠖は尺蠖の幼虫で、指で物の尺を計るように屈伸して進む姿が滑槽であり、哀れさを誘う虫である。その尺蠖虫と貨車の連結風景を取り合わせるなどまさに人食った一句である。諸語を得意とする作者の真骨頂といえるだろう。屋根のない貨車が玉突きのように首を立てて連結される様子は尺蠖の姿そのものであり、言い得て妙という他はない。

捨てられぬ一枚父の藍浴衣

【句評】夏になるとたんのすの奥に眠っている一枚の藍浴衣がふと脳裏をよぎる。誰か着るわけでもなく年々色あせて行くこの着物は父の形見の一枚であり、処分するのにはびかない作者の心情のにじむ一句である。今の世はAI頼りのネット社会となり親子の情までも希薄になりつつある中で心救われる思いがするのには筆者ばかりではあるまい。

夏場所や女人禁制総理杯

【句評】伝統を守り受け継いでいくことは国や個人にとって大切なことである。一方で、世の変遷とともに価値観も変化しており、特に男女同権という社会通念が定着する現代社会において男尊女卑が色濃く残る伝統には違和感もある。相撲が神事というのであれば、神は差別を喜ぶのだろうか。皇室典範もしかりである。そんな思いを投げかける一句である。

町並は明治の名残り凌霄花

七夕ややがて一人となる二人

連の里老々介護の車椅子

打ち水の後は静かに茶を立てり

令和びと男の子も日傘さしてゐる

放棄田の畦に列なす螢狩

風死して焦土のごとく息苦し

緑町 松林 真弓
佐間 西岡 備中
小針 酒井美智江
和田 小林 博矢
持田 中野 華泉
矢場 島田 健治
栄町 馬場 勇
(三沢一水選評)